

このワークショップは、毎年文部科学省が主催し、大学において看護学教育に携わる教員が参加して、看護学教育の改善と開発を議論することを目的としたワークショップである。本年は 11 月 13 日(月)～15 日(水)の 3 日間、千葉県木更津のかずさアカデミアホールで開催された。

### 1. はじめに

今回のテーマは、大学または大学院教育における人材育成の役割であった。テーマの重要性からして、このワークショップ参加者の条件は教授であることだった。

だが、なぜこの看護学教育ワークショップへ参加するために、FD の研修費が活用されたか疑問もあると思われるので、そのいきさつを簡単に述べておく。この出張は自分の研究費で行くことになった。しかし、そのほとんどを学会参加に費やしてしまっていた。そこで、このワークショップはFD と関連が深いという事からFD 関連の費用で出張できるよう配慮していただくことになった。そのために、出張後はFD 委員会へレポートの提出をすることが条件づけられた。出張の成果を報告することは、全学の教員の方々に、看護学教育の現状の一端をお知らせするのに良い機会であると考えている。この、3 日間で、話し合われた看護学教育のあり方についてその概要を報告する。

### 2. ワークショップの開催の目的と背景 (参加資料から)

看護系大学に対する社会からの期待を踏まえ、各大学の人材育成の現状および課題を整理・共有することを通じて、社会の期待に応える人材育成のあり方を検討する。

看護基礎教育の目的は、看護実践能力の育成にある。看護実践能力は、資格者すなわち専門職者として認められた立場での実践を通して習熟される。したがって、基礎教育で保証されるべき実践能力は、生涯にわたる継続的な学習を前提とした上で、最も基本的な必要不可欠である範囲にとどまると考えられる。

一方、大学院では、基礎教育修了後の看護実践体験が重視され、個人の看護実践体験を織り込んだ大学院教育が追求されている。しかし、日本の看護系大学は、わずか 10 数年の間に急増し、本年 4 月現在大学は 144 校、大学院修士課程 87、博士課程 37 となっている。こうした急激な変化に伴い、学習環境や条件が十分に確保できないことや大学院教育そのもののあり方や資格と関連した問題が出てきており改めて大学、大学院教育が果たすべき人材育成のあり方が問われる状況におかれている。

### 3. ワークショップの概要

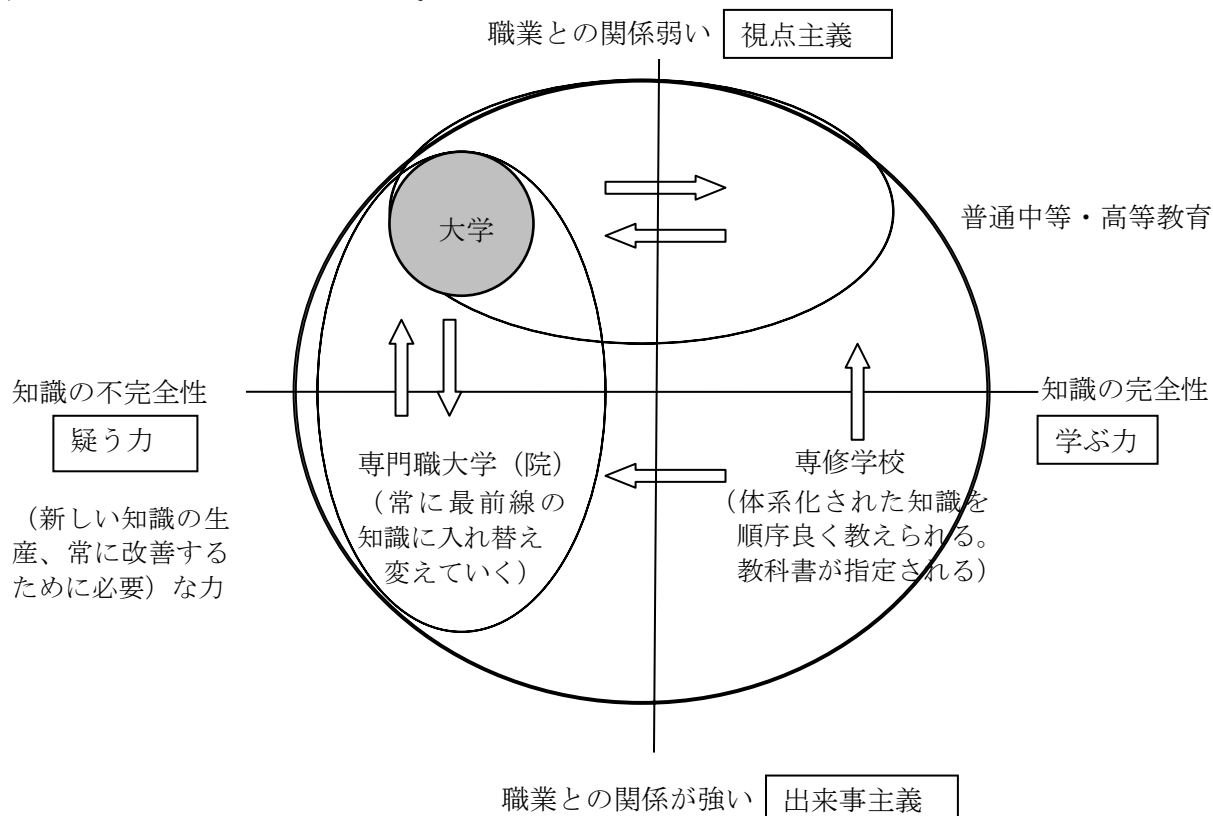
ワークショップは、基調講演、特別講演、グループワーク、全体討議から構成されている。最初に、文部科学省高等教育医学教育課の三浦公嗣課長が、本ワークショップの目的および医療の変化と看護教育を取り巻く現状とその課題が歴史を踏まえて説明された。

#### 1) 基調講演

「大学、大学院教育とキャリア形成—資格取得との関係から—」と題した東京大学大学

院教育学研究科の矢野真和教授の講演が行われた。主な講演内容は、変わる大学、変わらぬ知識の効用、「学びの習慣」の持続効果の3つであった。

一つ目の変わる大学では、今までの大学は、普通中等・高等教育から入り職業との関連が弱いと考えられていた。また職業的訓練や体系化された知識の習得を期待される専修学校とは異なると考えられ、下図のように位置づけられていた。しかし、これからの大学のあり方は、矢印の方向が示すように、学びはどこから入ってもよい、という NEO 新制大学となるのではないかと説かれた。



2つ目の変わらぬ知識の効用では、いままで、学校の知識は役立たないといわれてきたが、そうではなく、知識は有効であることが隠蔽されてきただけであると自説を唱えた。3つ目の「学び習慣」の持続的な効果では、調査結果を示しながら現在の読書習慣と所得が関連していること、そして現在の読書の習慣は大学時代の読書習慣と関連するという間接効果を示した。さらに、大学時代の学習熱心度は卒業時の知識・能力獲得と関連があり、その関連の度合いが高いほど現在の知識・能力獲得と高い関係がある。したがって、学生時代に学習習慣を身につけることは大変重要であることを力説された。最後に、大学全入時代というのは誤りである。何故なら経済的理由によって、まだまだ進学をあきらめている人が多い、こうした人たちが進学できるためには、経済の回復と授業料のCAP制の導入が必要であることが述べられた。看護の専門教育を担当する者にとっては、自信が持てる講演であったと共に、改善の視点も示唆された講演であった。

## 2) 特別講演

「社会が求める看護職のカー介護現場における看護活動から」と題した西村和美氏の

講演であった。西村氏は富山県富山市富岡町 NPO 法人デイサービス「このゆびと一まれ」の副理事長である。認知症の高齢者や障害児、健康な子ども、ターミナル期の人に至るまで、健康・不健康、老若男女を問わず、何時でも誰でも利用できる施設が必要だと考えた3名の看護師によって設立されたという、この施設設立の目的とケアの実例が熱く語られた。施設は資金や法律上の困難を乗り越えて、既成概念にとらわれない人間味あふれるデイケア施設としていまや、その名は全国に知られ、多くの見学者が訪れている。看護師という資格をフルに活かし、社会の隙間をつなぎ合わせているような活動の数々が感動と共に手に取るように伝わってきた。この講演から、看護の活動は幅広く、ユニークな専門職であること、看護の企業という側面を学ぶことができた。

こうした2つの講演を受けて、第1日目の夜から8グループに別れ、ワークが始まった。学部教育5グループ、大学院教育3グループに分かれた。私は学部教育に参加した。

### 3) グループワーク

#### (1) グループワークの方法

①社会（学生、ケア対象者、チーム医療の現場等）のニーズ・期待を整理する。②人材育成の現状と課題を見直し、教育改善の方向性やアイデアを導き出す。③教育改善の方向性やアイデアを整理し、人材育成のあり方を考える。という順序に従って各グループはファシリテーターの支援を得ながら、ワークを実施した。

#### (2) 全体発表、討議の結果

今後の学部・大学院教育が果たすべき人材育成に向けた教育改善の方向性やアイデアについて、各グループが整理し、発表した内容の中から、その一部を文章化せずに下記に示す。

##### ① 学部教育における人材育成のあり方

###### a. 大卒者に期待する学生の特質

実践能力と倫理性豊かな学生の育成

看護師として、人間としての成長と成熟

マネジメント能力を身につける（セルフマネジメント、キャリアマネジメント、組織のマネジメント、トップマネジメントこれらが重なり合って発展する）

変化する力（自己の成長と発達を促す力）

専門職としての力

脱病院主義看護・地球上どこでも活動できる能力

起業する力

他職種との連携・協働できる力

資源を生み出す共に、またそれを活用できる能力

自分に付加価値をつけることができる能力

###### b. 教育方法とその工夫

感性・意欲を高める意図的な体験学習

学部や領域を超えた教育の協働

臨床との連携またはユニフィケーション（現場と教育をよく知っている人が繋ぐ）

地域に開かれた魅力ある大学

大学を超えた組織作り—地域との連携

地域の教育力の活用

教育方法の改善、看護教育 8 領域がセクショナリズムを超え、教育の再構築をする

地域看護学実習を 1 年次から実施する

自己教育力を高めるカリキュラムの工夫

多様な学生、医療の変化に対応できる柔軟なカリキュラムの構築

大学間の連携

入試対策

c. 人材育成のための教員の質の向上

教員の質の向上

若手教員の育成

d. 卒業後のフォロー

大学が目指した教育評価と卒業生のフォローアップ

生涯を通して学び続けるフォローアップシステムの再構築

期待する人材を教育するために看護学教育のパラダイムシフト、つまり社会の実情(脱病院中心主義看護)にあった看護学教育をするために、現状の看護教育制度の改革が必要となってきたなど、多くのあり方が話し合われ、整理された。

② 大学院教育における人材育成のあり方

a. 現状の大学院教育の課題

定員の確保が困難

社会人が多く、昼夜開講による教員負担の増加

社会人が多く、長期履修制度を利用した修士の学生の研究指導に苦慮している

修了資格のみを求めて入学してくる学生の存在

社会人学生の背景と能力の多様性により、集合教育が組みにくく、教育効率が悪い

教員の数と質の確保が困難

医学部の中で、看護の独自性が出しにくい

他科と同一の入試のため看護学専攻者が入学しづらい

b. 修士課程修了生に求められる能力

研究のプロセスを理解し、研究成果を実践に結び付け活用できる

個々の対象者の状況から今後が予測できる

一人ひとりの生活の場に適したケアが提供できる

自己の活動がアピールできる

政策立案できる能力

リーダーの育成

コーディネーション能力

c. 大学院教育改善の方策

複数大学が協力して連合大学院としてはどうか(大学院間のネットワーク作り)

社会全体としての改善方策

社会の間違った認識の修正に対する PR

大学院生に将来を見据えたキャリアを示しうる教育内容

研究・教育能力を高めるためのカリキュラムの強化

大学院教育への理解を促す使命と役割をしっかりと認識する

ケア提供の場の拡大

#### 4. まとめ

学部教育は、各グループ間で合意点も多く見出され、卒業生に期待される人材像がかなり明確に出されている感があり、大学における看護学教育は充実しつつあるという印象が残った。

それに比べ、看護学の大学院教育は、歴史が浅いことや多様な背景や条件を抱えた社会人を受け入れていることから、3つのグループの発表の結果からは、人材育成のあり方について学部教育ほど明確な人材像が示されなかった。人材育成のあり方の方向性をまとめるというより、現状の問題点が明らかにされたという印象が残った。大学院教育をする大学では、多くの混沌とした問題を抱えていることが、全体討議の中から伝わってきた。こうした、問題解決の一つとして、学部卒業生の大学院進学率を高め、入学者の質を上げる必要があるようだ。司会者からは、看護系大学卒業生の大学院進学率が他の学部に比べ少ないことが示されたが、その理由はまだ定かにされていない。今後は卒業生に、大学教育と大学院教育の継続性を意識させる必要があるのではないかという提案もなされた。

3日間のワークショップの参加から、日本の看護学教育の実情を理解することができた。特に、大学院教育は全国的に共通する問題が存在することを知ることができた。こうした結果を本学科の教員と分かち合い、本学の看護学教育を検討する一助とできれば幸いだと考えている。

2006年11月21日提出